

主 題：満足欠乏症との訣別2

聖書箇所：詩篇 23篇

詩篇23篇、「主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。」と宣言したダビデのことばを前回学びました。一体、どのようにしてこの生涯に満足を見い出して行くのか、どうすれば本当に満たされた人生を送ることができるのか、そのことを私たちはこの詩篇23篇から学ぼうとしているのです。ダビデがこの詩篇を書いたときは、前回も学んだとおり、ダビデが実の息子アブシャロムによっていのちを脅かされ、自分が治めていたエルサレムの都を家臣とともに逃げて行った、そのような状況でした。困難に満ち、自分が願っている方向へ人生が進んでいないそのような中で、ダビデはどのように満足を見い出すことができたのでしょうか？前回、私たちが見たこと、ダビデが満足をもったその理由は、

I. 神に焦点を合わせる 1節

- A. 神を知ることは満足のカギである
- B. 神との個人的関係を持つことは満足の基礎である
- C. 正しい結論を導き出すことは満足の秘訣である

神がどのような方であるかを彼が正確に理解し、神との間に個人的な関係をしっかり持っていたということをダビデ自身がよく分かったときに、その知識はダビデの上に正しい結論を導き出したのです。それは「私には何一つ欠けるものはない」というものです。ダビデがこのような結論に到達したとき、主が愛してくださっている羊に対して、主はどんなときにも最善のものを与え続けてくださっていると確信することができたのです。これは神がイスラエルの民を導かれた方法でもありました。神はイスラエルの民を最善に取り扱われました。申命記2：7に「**事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはない。**」とあります。40年間、何度も不平不満を言い続けた民に神は必要なものを与え続けたのです。神は私たちに必要なものを備えてくださるのです。私たちが望むものがすべて与えられるのではありません。ダビデは言います。詩篇34：10「**若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。**」と、神が私たちの羊飼いだから私たちは良いものに欠けることはないのです。羊飼いは羊に何が必要かをよく知っているのです。

「**私は、乏しいことはありません。**」と言ったダビデは、このあと、もう一つの満足を見い出す原則を教えてください。

☆人生に満足を得る秘訣

II. 神の導きに信頼する 2-3節

私たちが神の導きに信頼を置くとき、どのような道を通っていても、どのような困難に遭遇したとしても、悲劇に見舞われたとしても、また、どんな喜びに出会ったとしても、常に、変わることはない満足を持ってこの生涯を生きて行くことができるようになるとダビデは教えるのです。そして、そのことを学ぶ私たちも心からの満足を得て、ダビデと同じようにこの詩篇を歌うことができるのです。もう一度、23篇を見てみましょう。

- :1 主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。
- :2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
- :3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
- :4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませぬ。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
- :5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
- :6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まひましよう。

今日は2、3節を見て行きます。ダビデはここで三つのことをもって、主の導きに信頼することを教えてください。

A. 神は私たちに休息へと導かれる 2節

「**主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。**」とここには二つの表現がありますが、これはどちらも「神が私たちに安らぎを与える、休息を与える」という意味です。「**緑の牧場**」とはやわらかい新鮮な草が一面に生えた丘を表わすことばです。そこで羊たちは草を食べ安らぐのです。この表

現をもって、ダビデはそこにある休息と喜びを表わしています。実際にエルサレムの近郊、パレスチナにおいては牧羊する人たちは、特に夏の間は、このような緑の繁った丘を捜すことが困難でした。牧草地を移動しながら、旅を続けるのです。ダビデは「緑の牧場」という表現によって、神が私たちがいかにすばらしい場所へ導いてくださっているのかを考え、その困難さとまた祝福を知るのです。私たちがこのことばから理解するのは、神は私たちに食べ物、水など日常の必要が与えられるということです。しかし、ダビデが言いたかったことはそうではないのです。2節には「食べる」「飲む」ということばは出てきません。ダビデが言いたかったことは、神は安らぎを与えるということです。「**緑の牧場に伏させ**」というのは、牧草地で寝かせる、休ませるということです。これは羊が安心して横になっている状態です。ある神学者は、牧師になる前にニュージーランドで牧羊の経験があったのですが、その人がこの23篇に関して書いた著書に、羊が横になるためには四つの条件が揃わなければならないと書いています。それは、(1) 安全が保障されていること。羊は非常に臆病な動物ですから、安心、安全が必要なのです。(2) 社会的プレッシャーからの解放。群の中には力関係がありますから、力のある羊は戦いを挑んで来たりします。そのような状況があると羊たちは安心して寝ることはできないのです。神はこのことを旧約聖書のエゼキエル書でこのように説明しています。34：15－16、20－22を見ましょう。「**わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。——神である主の御告げ。——**：16 **わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のを力づける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは正しいさばきをもって彼らを養う。**」：20 **それゆえ、神である主は彼らにこう仰せられる。見よ。わたし自身、肥えた羊とやせた羊との間をさばく。**：21 **あなたがたがわき腹と肩で押しつけ、その角ですべての弱いものを突き倒し、ついに彼らを外に追い散らしてしまったので、**：22 **わたしはわたしの群れを救い、彼らが二度とえじきとにならないようにし、羊と羊との間をさばく。**」。つまり、良い羊飼いに牧されている羊の群れは、羊飼いが群れをコントロールして安全を保つのです。それゆえに、その群れには安らぎが与えられるのです。(3) 羊のイライラが取り除かれること。羊は弱く臆病で愚かな動物です。傷ついてよく休めないことが起こります。羊飼いは1頭ずつよく調べてケアし、羊が快適に過ごせるようにします。(4) 十分に満腹していること。食べ物の供給です。

羊を飼っていたダビデは言います。「主は私の羊飼い。この主は私を緑の牧場に伏させてくださる」と。ダビデは敵に追われて困難の中にいましたが、「私は安全だ」と言うのです。神は羊飼いだから、私たちに安らぎを与え、私たちがケアしてくださり、空腹で放置されるようなことはない。

次の表現は「**いこいの水のほとりに伴われます。**」です。いこいの場にある水の流れのことを指しています。このポイントは水の存在ではなく、私たちがいこわせ、安らぎを与え、休息を与える場が備えられて、そこに私たちが導かれているということです。羊には大量の水は必要ではありません。一日の水分は朝露に濡れた牧草を食べることで十分だったのです。これは神が渇きをいやされるということではなく、私たちがどのような困難な中であっても、神は私たちがいこわせることができる、安らぎを与えることができる、休息を備えてくださる方だとダビデは言うのです。イザヤはこのように言いました。40：11「**主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。**」、そこには安らぎがあるのです。神のケアがあるのです。このように私たちは神の安らぎに信頼を置くことができるのです。ペテロはそのことがよく分かっていたゆえに、1ペテロ5：6－7でこのように言いました。「**ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。**：7 **あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。**」、またイエスは山上の説教の中でこう言われました。マタイ6：31－34「**そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。**：32 **こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。**：33 **だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。**：34 **だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。**」。神が私たちの必要を満たしてくださることが分かっているから心配がないのです。神が私たちにいこいの場を備えるというその行為を与えてくださるのです。ダビデはこのことがよく分かっていたゆえに、どんな困難な中にも満足を見出すことができたのです。心に余裕があったのです。私たちがこの神が与えてくださる安らぎを知るとき、私たちもこの人生に満足を見出すことができるのです。この神のわざに信頼するかしないか、それは私たちの問題です。困難なときにダビデは神を信頼しました。

B. 神は私たちに再生を与えてくださる 3 a 節

休息を、安らぎを与えるだけではないのです。神は私たちに再びすばらしいものへと変えることができるというのです。安らぎということばの中に、落ち着きや安心感、平安というものがあるとすれば、この再生ということばには新鮮さ、回復、新生という意味があります。私たちが様々な問題に陥るとき、

心は挫け悲しみに満ちます。どうすればいいのかわからないといった状況で勇気を失い、意気消沈するとき、この「**主は私のたましいを生き返らせ、**」ということばに慰めを見つけます。「生き返らせ」ということばが使われていることは、その前にダビデの心は死んでいたのです。この箇所に限らず、多くの詩篇の著者たちは自分の嘆きを神に訴えています。「あなたはいったいどこにおられるのですか？」と。問題は私たちの心から喜びを奪い、苦しみを与えます。まるで希望など全くないかのような思いにさせ、落胆の生涯を歩むように説き伏せようとします。けれども慰められるのです。私たちの羊飼いは、私たちのすべてをよみがえらせてくださる、最もすばらしい状態へと立ち返らせてくださるのだとダビデは言うのです。それが羊飼いと神が私たちにしてくださることで、私には乏しいことがないという根拠でもあるのです。なぜなら、どんな困難の中にも私たちに新しい思いを、すばらしい状態に私たちを変える力を与えてくださるからです。ソロモンは箴言18：14でこのように言いました。「**人の心は病苦をも忍ぶ。しかし、ひしがれた心にだれが耐えるだろうか。**」と。文語訳聖書はこれをこのように訳しています。「人の心はなおその病を忍ぶべし。されど、心の痛めるときはだれがこれに耐えんや。」と。「ひしがれた心に」を「心の痛めるときは」と訳しています。原文を見るとこの文語訳の方がより良いと思われるのですが、心が弱っているときは何もかもが辛いのですが、心がしっかりしている時は何とか進んで行こうと力と忍耐を尽くします。けれども、それが続いてゆくと、私たちの心は次第に弱ってきます。そのような時にはわずかな小さなことにも耐えられないほど、力を失くしてしましますが、私たちの神はその痛みを、苦しみを覚えておられます。そして、神はそのような私たちを以前のように、いや、それ以上にすばらしい状態へと導くと言われるのです。

パウロ自身も弱さを感じたときがありました。様々な困難が彼を襲いました。肉体的なものもあり精神的なものもたくさんありました。彼が伝道して建てていった教会のことを思い、人々を心に掛けていました。そのパウロはこのように言いました。Ⅱコリント12：10「**ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。**」、神はその弱さのうちに働いてくださることをパウロはよく知っていたのです。私たちは、私たちを再生してくださる神の働きに信頼するべきです。そのとき、私たちはどのような中でも満足を持って進んで行くことができるのです。パウロはローマ8：28－30でこのように教えています。「**神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。：29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。：30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。**」。神はなぜ、すべてのことを働かせて益としてくださるのでしょうか？どのような目的か、それが30節です。神は私たちが最高の状態、神に似た者となるその栄光を与えるというのです。神は私たちを導いておられるのです。私たちがより神に似た者となるように鍛え助けてくださるのです。このような神の導きにダビデは信頼したのです。

C. 神は私たちを義の道に導いてくださる 3 b 節

3節の後半にダビデはこのように言いました。「**御名のために、私を義の道に導かれます。**」と。この「導く」ということばは旧約聖書の中で、神がイスラエルの民をエジプトから導き出した、そのことを指して使われることばです。実際にこの神の導きを考えるとき思い浮かぶのは出エジプト記の14章です。そこには神がイスラエルの民のために紅海を二つに分けられて、民がその海の中を通り抜けて行く、その記事が書かれています。もし、この箇所を注意深く見ないなら、大切なことを見逃してしまいます。イスラエルの民はエジプトから出て来ました。彼らの前には神は昼は雲の柱、夜は火の柱をもって彼らを導きました。紅海にやって来たとき、前に進めなくなりました。遠くの方にエジプト軍が追いかけて来ています。人々はパニック状態です。そのように想像していたなら、もう一度、この箇所を見直す必要があるのです。実は、エジプトを出た後、イスラエルの民は海に沿う荒野の道をはるか遠くまで旅を続けていました。かなり南下していたのです。そのとき、神はこのように言われました。14：1－2「**主はモーセに告げて仰せられた。：2 「イスラエル人に、引き返すように言え。」**と、もう一度エジプトの方に引き返すようにと。そして、前は海、後ろはエジプト軍という状態になったのです。民は恐れただけですが、神には計画があったのです。4節を見ると「**わたしはパロの心をかたくなにし、彼が彼らのあとを追えば、パロとその全軍勢を通してわたしは栄光を現わし、エジプトはわたしが主であることを知るようになる。**」このような記事はこの後も何度か書かれています。18節にも「**パロとその戦車とその騎兵を通して、わたしが栄光を現わすとき、エジプトはわたしが主であることを知るのだ。**」とあります。イスラエルの民は神がどれほど偉大な方であるかを目の当たりにしたのです。ゆえに彼らは、31節「**イスラエルは主がエジプトに行なわれたこの大なる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。**」のです。

神は何の計画もなく私たちに困難を与えられるのではありません。神は私たちを導いておられるので

す。どのような道でしょう？ダビデが言うのは「**義の道に導かれます。**」です。これは単に、私たちが導かれる道が正しいというのではなく、その先にあるのが何かということを行っているのです。この道は神の義へと向かっている道なのです。神の義が現わされる道です。私たちは多くのときに、愚かな羊と同じような行動を取ります。羊は一度自分に幸福をもたらすものがあると分かるなら、そこへ行き続けるのです。だから、牧草地へ行ったとき、良い羊飼いに飼われていない羊の群れは、草を食べ尽くして、瞬く間にその牧草地を廃墟にします。草のあるところに進み続け食べることを止めないのです。ところが、良い羊飼いに導かれているなら、必要な正しいところへと導かれます。最善のところなのです。私たちにとっても同じです。自らの欲望を満たそうとして自分にとって最善である道を考え、その道に進んでいないと神に疑問をぶつけ、神が与えようとしている良いものを拒むのです。けれども、ダビデは知っていました。神は良い羊飼いであり、義の道へと導いてくださっていることを。愚かで迷い出るそのような羊に対して、神は私の道に従って来なさいと呼びかけています。だから、イエスが弟子たちに向かって、もしわたしの弟子になりたかったら自分を捨てわたしに従ってきなさいと言われた意味が分かります。マタイ16：24「それから、イエスは弟子たちに言われた。「**だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。**」と。私たちは自分自身の願望によって生きようとしてはいけないのです。自らを捨てて羊飼いのその声に耳を貸さなければならないのです。ヨハネ10：2-4に「しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。**:3 門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けず。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。:4 彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。**」とあります。私たちの羊飼いは私たちの前に立って私たちを呼んでおられるのです。神が示しておられる道を歩んで行きなさいと言われます。どのようにして？みことばを通して、私たちのうちに与えられている聖霊を通してです。わたしが示す道を喜んで歩みなさいと、ダビデはそのことがよく分かって神を信頼していたのでそのとおり実践したのです。

3b節の初めに大切なことばがあります。「**御名のために、**」と。なぜ、神はこのようにすばらしいわざを私たちにしてくださるのでしょう。それは変わることはないのでしょうか？ダビデはこの小さなことばをもって私たちに確信を与えてくれるのです。神はなぜ私たちを導いてくださるのでしょう？私たちに最善を与えてくださるのでしょう？どんなときでも最善が与えられていると私たちが安心して確信を持つことができる、それは神ご自身の名誉のためです。神は私たち羊を良い状態に保つことによって神がいかにすばらしい羊飼いであるかを証明しようとされたのです。神はご自身の栄光のためにすべてのことを行われます。旧約聖書には「御名」ということばと「神の栄光」が密接な関係で多く記されています。神が神でなくなること、神がそのすばらしさを放棄することがあるのでしょうか？私たちが神にとって良い羊でなくなることはありますが、神が偉大な方でなくなることは絶対にありません。だから、私たちはたとえどのような状態に置かれても安心することができます。私たちが神の民とされているなら、その民のために神はご自身の名をかけて最善のことをなされるからです。神の栄光は守られるべきものであり、神は必ずそれを守る方であることを聖書全体が私たちに教えるのです。

私たちはどのようにして満足を保ち続けることができるのでしょうか？

私たちは羊飼いを知る必要があります。神に焦点を合わせ、神のことを忘れることなく、すばらしい方が私たちをケアしてくださっていることを忘れてはいけません。それと同時に私たちは、神が確かに私たちに安らぎを与えようとし、弱りきった私たちに新鮮な力を与えるという再生の働きをしてくださる、私たちが神に喜ばれる正しい道を歩めるように、私たちの先頭に立って私たちを呼んでくださっているのです。私の導く道に従って来なさいと。ダビデはそのことをよく知っていたゆえに、困難の中で「私は満足する」と言いました。パウロもそのことを知っていたゆえに「私は満足する秘訣を学んだ」と言いました。

私たち一人一人がその秘訣を同じように学ぶことができるように、それを適用して、困難な中に、悲しみの中で、ときに辛さに満ちたこの生涯を歩んで行けるように願います。

引用聖書箇所：

詩篇79：9-13「**私たちの救いの神よ。御名の栄光のために、私たちを助けてください。御名のために、私たちを救い出し、私たちの罪をお赦してください。:10 なぜ、国々は、「彼らの神はどこにいるのか。」と言うのでしょうか。あなたのしもべたちの、流された血の復讐が、私たちの目の前で、国々に思い知らされますように。:11 捕われ人のうめきが御前に届きますように。あなたの偉大な力によって、死に定められた人々を生きながらえさせてください。:12 主よ。あなたをそしった、そのそしりの七倍を、私たちの隣人らの胸に返してください。:13 そうすれば、あなたの民、あなたの牧場の羊である私たちは、とこしえまでも、あなたに感謝し、代々限りなくあなたの誉れを語りあげましょう。」**

詩篇106:47「私たちの神、主よ。私たちをお救いください。国々から私たちを集めてください。あなたの聖なる御名に感謝し、あなたの誉れを勝ち誇るために。」

イザヤ48:11「わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行なう。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしはわたしの栄光を他の者には与えない。」

詩篇148:13「彼らに主の名をほめたたえさせよ。主の御名だけがあがめられ、その威光は地と天の上にあるからだ。」

詩篇115:1「私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。」

出エジプト記14章「14:1主はモーセに告げて仰せられた。:2「イスラエル人に、引き返すように言え。そしてミグドルと海の間にあるピ・ハヒロテに面したパアル・ツェフオンの手前で宿営せよ。あなたがたは、それに向かって海辺に宿営しなければならない。:3 パロはイスラエル人について、『彼らはその地で迷っている。荒野は彼らを閉じ込めてしまった。』と言うであろう。:4 わたしはパロの心をかたくなにし、彼が彼らのあとを追えば、パロとその全軍勢を通してわたしは栄光を現わし、エジプトはわたしが主であることを知るようになる。」そこでイスラエル人はそのとおりにした。:5 民の逃げたことがエジプトの王に告げられると、パロとその家臣たちは民についての考えを変えて言った。「われわれはいったい何ということをしたのだ。イスラエルを去らせてしまい、われわれに仕えさせないとは。」6 そこでパロは戦車を整え、自分でその軍勢を率い、:7 えり抜き戦車六百とエジプトの全戦車を、それぞれ補佐官をつけて率いた。:8 主がエジプトの王パロの心をかたくなにされたので、パロはイスラエル人を追跡した。しかしイスラエル人は臆することなく出て行った。:9 それでエジプトは彼らを追跡した。パロの戦車の馬も、騎兵も、軍勢も、ことごとく、パアル・ツェフオンの手前、ピ・ハヒロテで、海辺に宿営している彼らに追いついた。:10 パロは近づいていた。それで、イスラエル人が目を上げて見ると、なんと、エジプト人が彼らのあとに迫っているではないか。イスラエル人は非常に恐れて、主に向かって叫んだ。:11 そしてモーセに言った。「エジプトには墓がないので、あなたは私たちを連れて来て、この荒野で、死なせるのですか。私たちをエジプトから連れ出したりして、いったい何ということ私たちにしてくれたのです。:12 私たちがエジプトであなたに言ったことは、こうではありませんでしたか。『私たちのことはかまわないで、私たちをエジプトに仕えさせてください。』事実、エジプトに仕えるほうがこの荒野で死ぬよりも私たちには良かったのです。」:13 それでモーセは民に言った。「恐れてはいけません。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。:14 主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」:15 主はモーセに仰せられた。「なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエル人に前進するように言え。:16 あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真中のかわいた地を進み行くようにせよ。:17 見よ。わたしはエジプト人の心をかたくなにする。彼らがそのあとからはいつて来ると、わたしはパロとその全軍勢、戦車と騎兵を通して、わたしの栄光を現わそう。:18 パロとその戦車とその騎兵を通して、わたしが栄光を現わすとき、エジプトはわたしが主であることを知るのだ。」:19 ついでイスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移って、彼らのあとを進んだ。それで、雲の柱は彼らの前から移って、彼らのうしろに立ち、:20 エジプトの陣営とイスラエルの陣営との間にはいった。それは真暗な雲であったので、夜を迷い込ませ、一晩中、一方が他方に近づくことはなかった。:21 そのとき、モーセが手を海の上に差し伸ばすと、主は一晩中強い東風で海を退かせ、海を陸地とされた。それで水は分かれた。:22 そこで、イスラエル人は海の真中のかわいた地を、進んで行った。水は彼らのために右と左で壁となった。:23 エジプト人は追いかけて来て、パロの馬も戦車も騎兵も、みな彼らのあとから海の中にはいつて行った。:24 朝の見張りのころ、主は火と雲の柱のうちからエジプトの陣営を見おろし、エジプトの陣営をかき乱された。:25 その戦車の車輪をはずして、進むのを困難にされた。それでエジプト人は言った。「イスラエル人の前から逃げよう。主が彼らのために、エジプトと戦っておられるのだから。」:26 このとき主はモーセに仰せられた。「あなたの手を海の上に差し伸べ、水がエジプト人と、その戦車、その騎兵の上に返るようにせよ。」:27 モーセが手を海の上に差し伸べたとき、夜明け前に、海がもとの状態に戻った。エジプト人は水が迫って来るので逃げたが、主はエジプト人を海の真中に投げ込まれた。:28 水はもとに戻り、あとを追って海にはいつたパロの全軍勢の戦車と騎兵をおおった。残された者はひとりもいなかった。:29 イスラエル人は海の真中のかわいた地を歩き、水は彼らのために、右と左で壁となったのである。:30 こうして、主はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見た。:31 イスラエルは主がエジプトに行なわれたこの大なる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。